

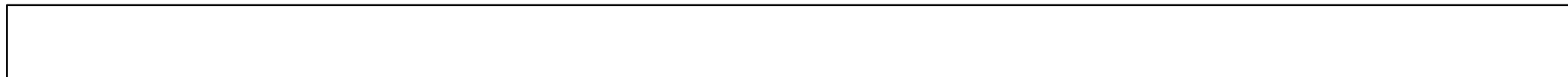
全般季節予報支援資料 1か月予報

2025年11月13日

予報期間：11月15日～12月14日

この資料は、気象事業者等が、気象庁の提供する季節予報の根拠を理解するための補助資料であり、そのままの形で一般に提供することを想定して作成したものではありません。

特に注意を要する事項



出現の可能性が最も大きい天候

北日本日本海側では、平年に比べ曇りや雨または雪の日が少ないでしょう。

北・東日本太平洋側では、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

東・西日本日本海側では、平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。

西日本太平洋側では、天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

沖縄・奄美では、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

全般1か月予報(確率)

1か月		気温(%)	降水量(%)	日照時間(%)	降雪量(%)
		低 並 高	少 並 多	少 並 多	少 並 多
北日本	日本海側 太平洋側	20:40:40	40:30:30 40:30:30	20:40:40 20:40:40	
東日本	日本海側 太平洋側	30:30:40	50:30:20 50:30:20	10:30:60 10:40:50	
西日本	日本海側 太平洋側	30:40:30	60:30:10 60:30:10	10:30:60 10:30:60	
沖縄・奄美		30:40:30	40:30:30	40:30:30	

気温	1週目(%)	2週目(%)	3～4週目(%)
	低 並 高	低 並 高	低 並 高
北日本	40:50:10	20:30:50	20:30:50
東日本	50:40:10	20:40:40	20:40:40
西日本	50:40:10	20:40:40	30:30:40
沖縄・奄美	40:50:10	20:40:40	40:30:30

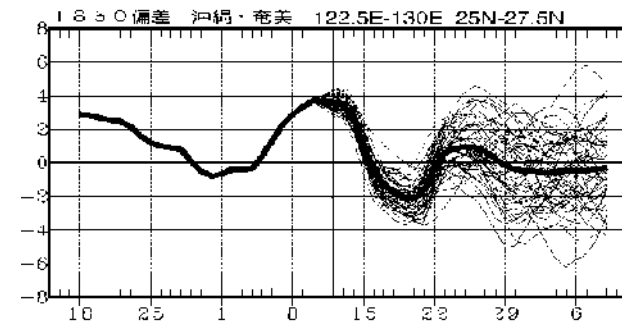
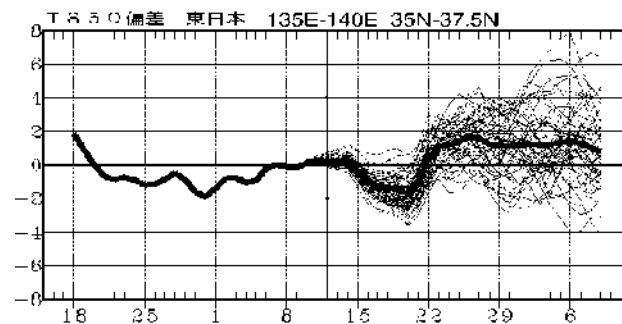
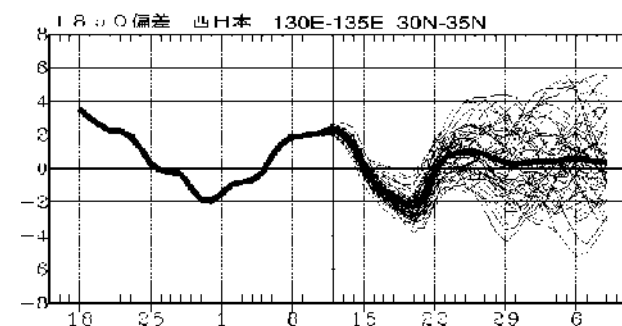
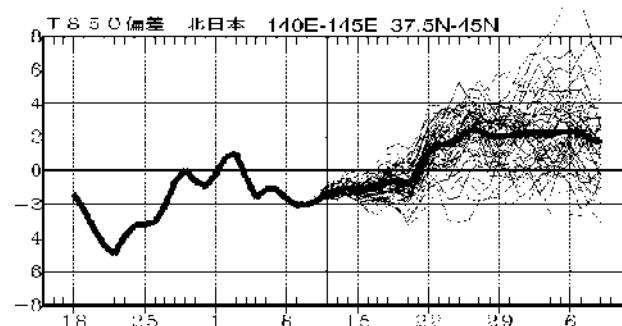
全般1か月予報のポイント

- 北日本では、寒気の影響が弱いため、向こう1か月の気温は平年並か高いでしょう。
- 高気圧に覆われやすく、寒気の影響を受けにくい時期があるため、向こう1か月の降水量は、東・西日本では少ないでしょう。また、向こう1か月の日照時間は、東・西日本では多く、北日本では平年並か多いでしょう。

各週における天候のポイント(気温)

	1週目(11/15～11/21)	2週目(11/22～11/28)	3～4週目(11/29～12/12)
想定される天候(気温)	北日本と沖縄・奄美では平年並でしょう 東・西日本では低いでしょう。	北日本では高く、東・西日本と沖縄・奄美では平年並か高いでしょう。	北日本では高く、東日本では平年並か高いでしょう。 西日本と沖縄・奄美ではほぼ平年並でしょう。
根拠	東・西日本中心に、上空の寒気や、シベリア高気圧の張り出しに伴う寒気の影響を受ける。(P.12, P.13参照)	冬型の気圧配置が弱く、寒気の影響が弱い。また、北日本中心に低気圧前面の暖かい空気が流れ込みやすい。(P.12, P.13参照)	北日本中心に上空のリッジの影響を受け、寒気の南下が弱い。(P.12, P.13参照)

850hPa気温 偏差時系列

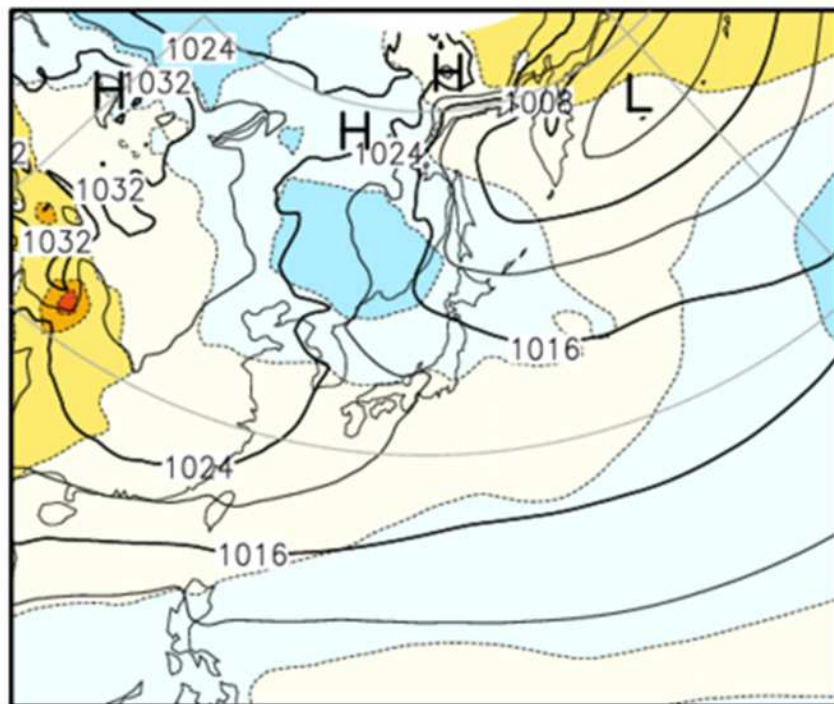


各週における天候のポイント(天気)

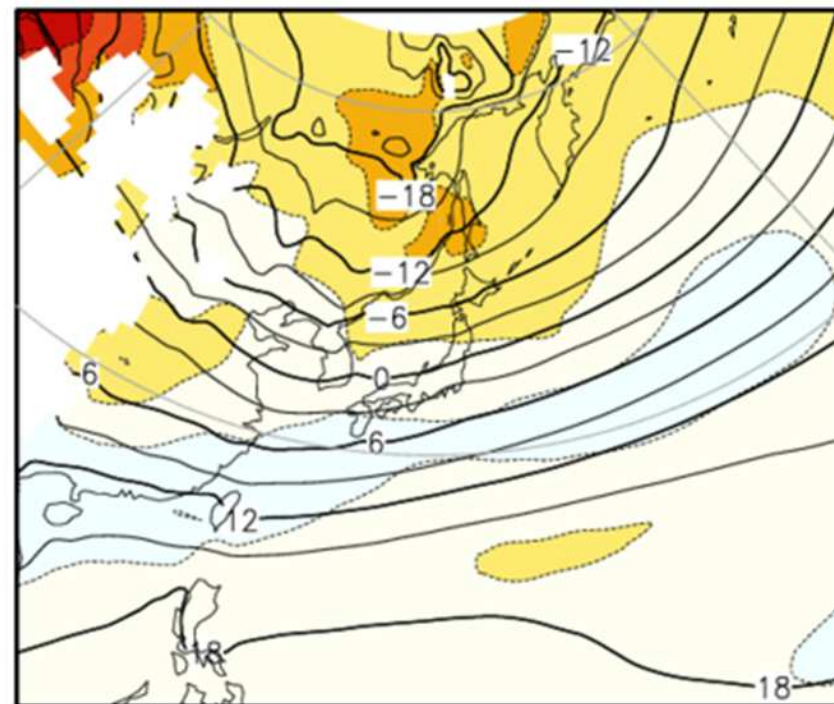
	1週目(11/15～11/21)	2週目(11/22～11/28)	3～4週目(11/29～12/12)
想定される 天候 (天気)	北日本日本海側では、平年と同様に曇りや雨または雪の日が多いでしょう。 北・東日本太平洋側では、高気圧に覆われやすいため、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。 東・西日本日本海側では、高気圧に覆われやすいため、平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。 西日本太平洋側では、天気は数日の周期で変わりますが、高気圧に覆われやすいため、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。 沖縄・奄美では、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。	北日本日本海側では、寒気の影響を受けにくく、高気圧に覆われやすいため、平年に比べ曇りや雨または雪の日が少ないでしょう。 北・東日本太平洋側では、高気圧に覆われやすいため、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。 東・西日本日本海側では、高気圧に覆われやすく、寒気の影響を受けにくいため、平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。 西日本太平洋側では、天気は数日の周期で変わりますが、高気圧に覆われやすいため、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。 沖縄・奄美では、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。	北日本日本海側では、寒気の影響を受けにくいため、平年に比べ曇りや雨または雪の日が少ないでしょう。 北・東日本太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。 東日本日本海側では、寒気の影響を受けにくいため、平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。 西日本日本海側では、高気圧に覆われやすく、寒気の影響を受けにくいため、平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。 西日本太平洋側では、天気は数日の周期で変わりますが、高気圧に覆われやすいため、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。 沖縄・奄美では、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。
根拠	東・西日本中心に、移動性の高気圧に覆われやすい。(P.10-P.13参照)	冬型の気圧配置が弱く、寒気の影響が弱い。北・東・西日本は移動性の高気圧に覆われやすい。(P.10-P.13参照)	北・東日本中心に寒気の影響が弱い。西日本中心に移動性の高気圧に覆われやすい。(P.10-P.13参照)

数値予報モデルからみる全般1か月予報のポイント

海面気圧(1か月)



上空約1500mの気温(1か月)

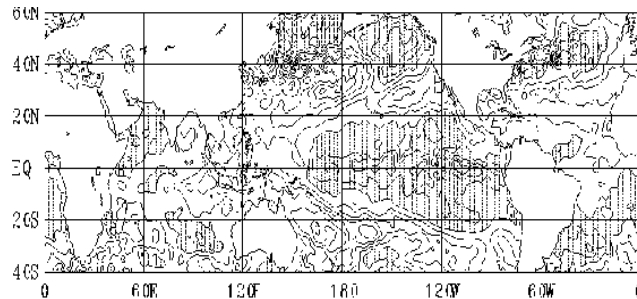


1か月平均の海面気圧(左図)は、中国東北付近で気圧が平年より低く、シベリア高気圧の張り出しが日本海付近で弱いため、北日本中心に冬型の気圧配置が長続きしないでしょう。また、東シナ海から日本の南東で平年より気圧が高く、東・西日本中心に高気圧に覆われやすいでしょう。

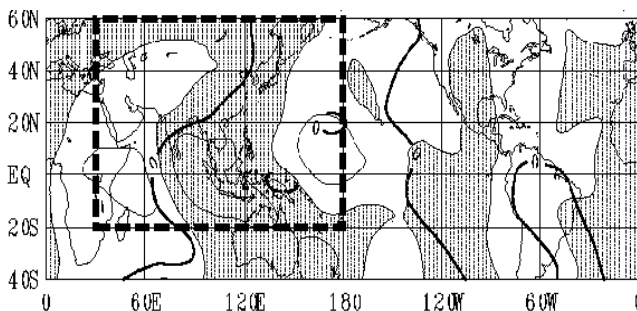
上空約1500mの気温(右図)は、寒気の南下が弱く、北日本中心に平年より高い一方、東日本以南は平年からの隔たりが小さいと予測されています。

予報資料の解釈(1か月) 熱帯循環場

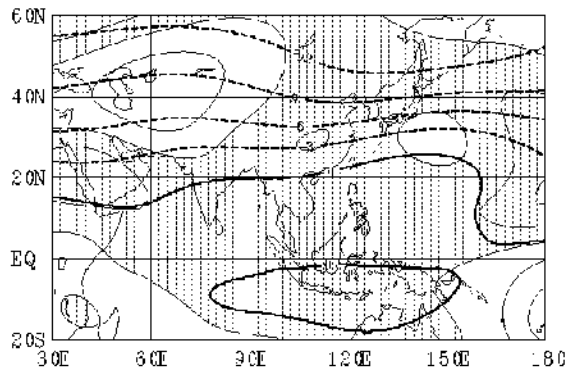
SST偏差



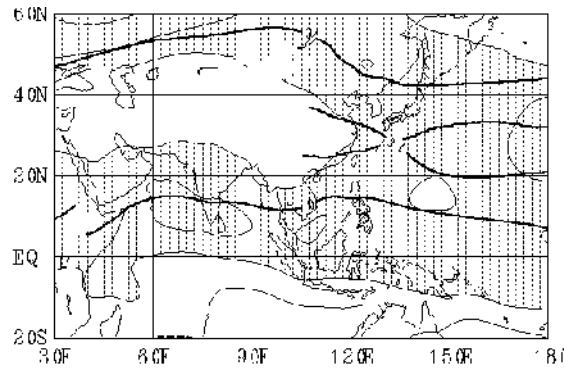
200hPa速度ポテンシャル



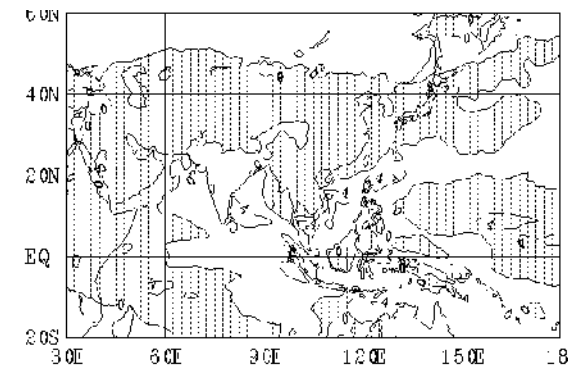
200hPa流線関数



850hPa流線関数



降水量



SST偏差は、ラニーニャ現象的かつ負のインド洋ダイポールモード的な分布。

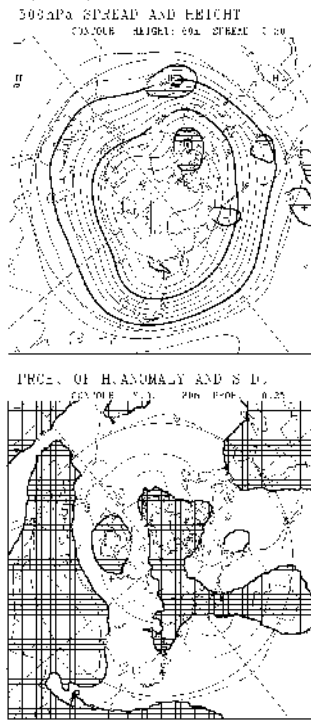
200hPa速度ポテンシャルは、インド洋東部からインドネシア付近を中心に発散偏差、インド洋西部を中心に収束偏差。SSTと熱帯季節内変動の影響。

200hPa流線関数は、アラビア半島付近で低気圧性循環偏差、中央アジアを中心に高気圧性循環偏差。日本付近は(相対的な)高気圧性循環偏差。熱帯の対流活動とロスビー波束伝播の影響。

850hPa流線関数は、熱帯の対流活動に関連し、インド洋から南シナ海にかけて低気圧性循環偏差。

降水量は、インド洋東部から東南アジアの広い範囲で多雨偏差。日本付近は少雨偏差。

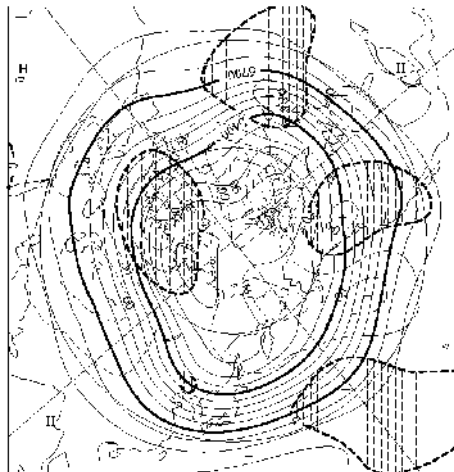
予報資料の解釈(1か月) 北半球循環場



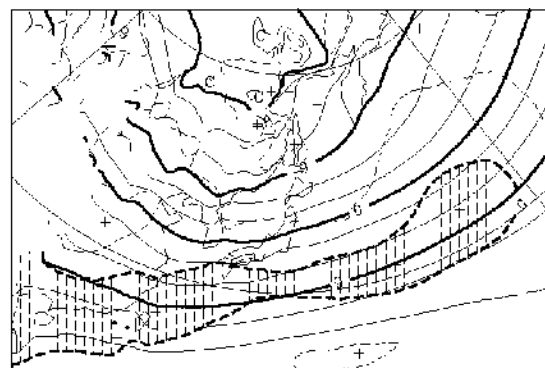
500hPa高度は、極域では正偏差、西半球から中央シベリアにかけて波列状の偏差パターンが卓越。日本付近は広く正偏差だが、高偏差確率50%以上の領域は見られず、日本付近の偏差は小さい。

850hPa気温は、大陸から北日本付近にかけて広く正偏差だが、日本の南から沖縄・奄美付近には負偏差域も見られる。海面気圧は、中国東北区から北日本付近にかけて負偏差で、北日本中心に冬型の気圧配置が弱い。一方、華中から日本の南東海上にかけては正偏差で、シベリア高気圧が東シナ海付近へ張り出す時期がある。また、東・西日本中心に高気圧に覆われやすい。

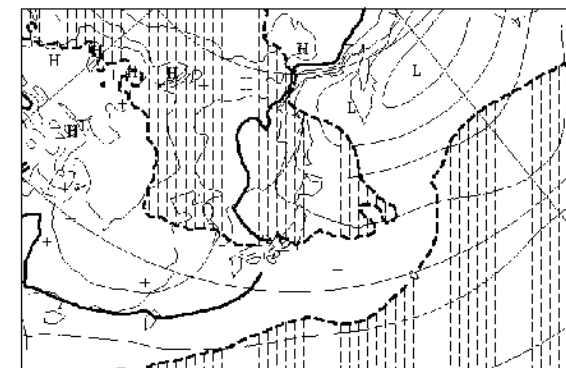
500hPa高度



850hPa気温

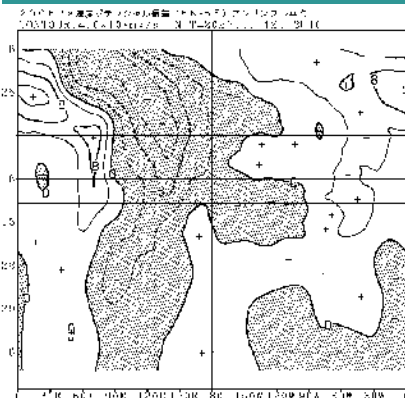


海面気圧



予報資料の解釈(各週) 熱帯の対流活動

200hPa速度ポテンシャル偏差時系列

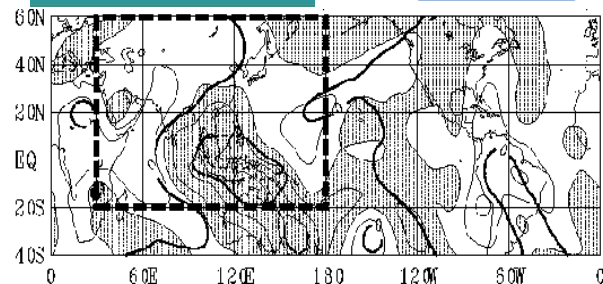


200hPa速度ポテンシャルは、1週目後半以降、熱帯季節内変動に伴う発散偏差域がインドネシア付近から太平洋へ東進する。一方、インド洋西部では対流不活発な状態が続く、特に3週目以降に強まる。ただし、熱帯季節内変動の予測とその影響(亜熱帯ジェット気流沿いのロスビー波東伝播への寄与)には不確実性がある。

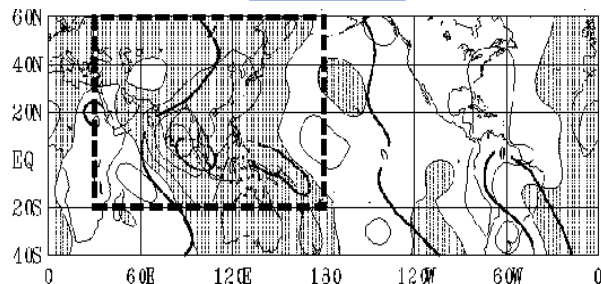
降水量は、1週目はインド洋東部と東南アジア付近で多雨偏差。2週目は、東南アジア付近の多雨偏差は北西進し、ベンガル湾で多雨偏差が強まる。インド洋南西部は少雨偏差。3~4週目は、インド洋西部で少雨偏差が広がり、インド洋東部から東南アジア付近の多雨偏差は弱まる。

200hPa速度ポテンシャル

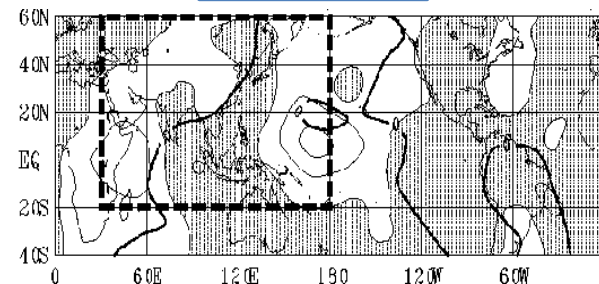
1週目



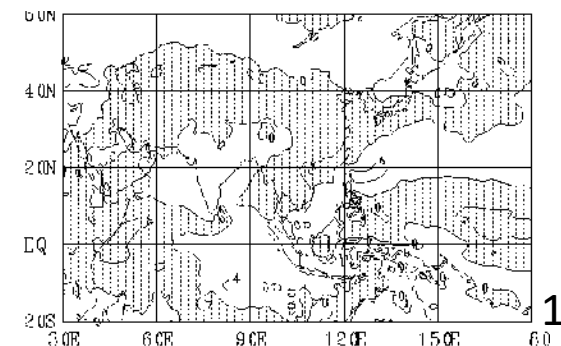
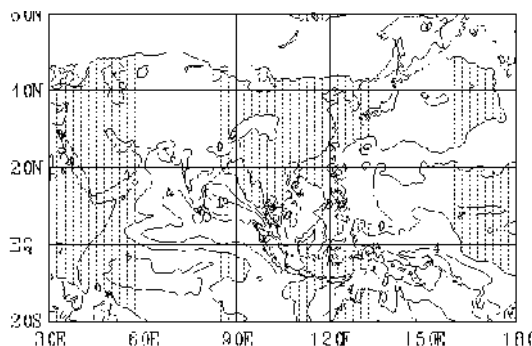
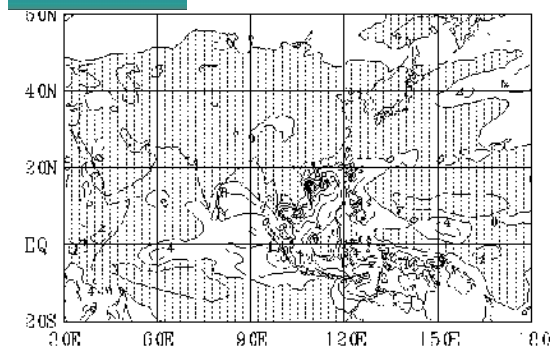
2週目



3~4週目



降水量



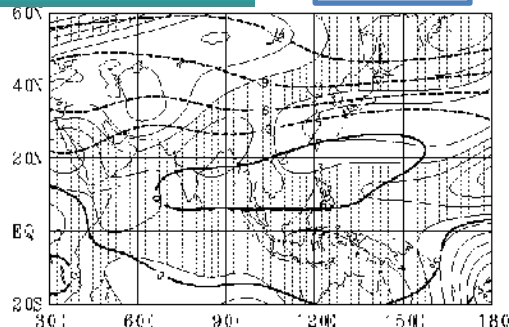
予報資料の解釈(各週) 熱帯循環場

200hPa流線関数は、1週目は亜熱帯ジェット気流沿いに波列状の偏差パターンが見られ、日本の南が高気圧性循環偏差。2週目も熱帯の対流活動の影響を受けた亜熱帯ジェット気流沿いのロスビー波東伝播により、日本付近は相対的な高気圧性循環偏差となっているが、熱帯季節内変動の予測に不確実性があり、波列の位相はずれる可能性もある。3～4週目も2週目と同様の偏差傾向だが、偏差は小さい。

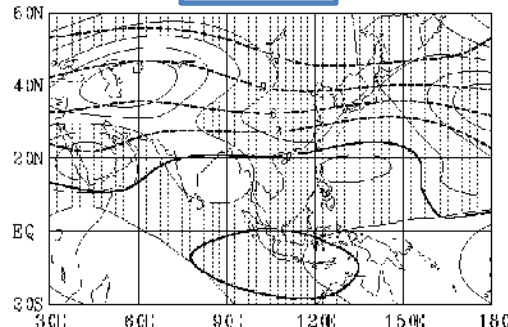
850hPa流線関数は、1週目から2週目にかけては、対流活動に対応して、インド洋から東南アジア付近が低気圧性循環偏差となる。日本の南は高気圧性循環偏差で、等価順圧構造。3～4週目は日本の南東海上で低気圧性循環偏差となり、西日本中心に湿った空気の影響を受けにくい時期がある。

200hPa流線関数

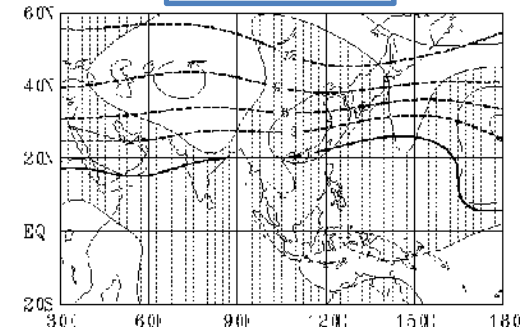
1週目



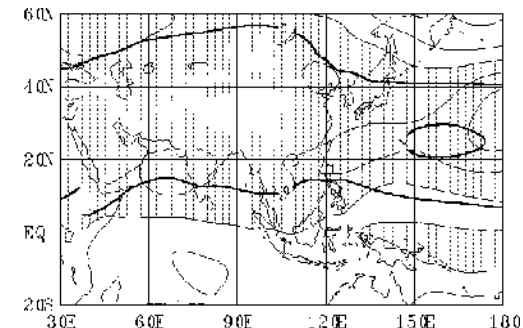
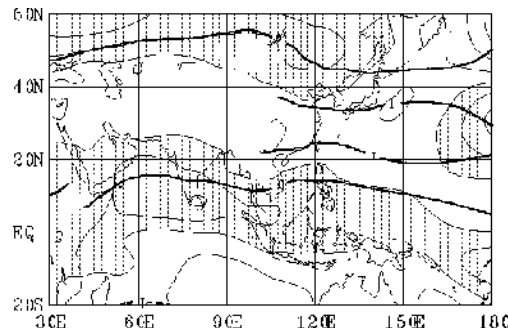
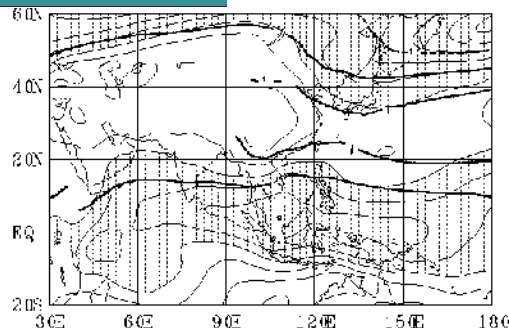
2週目



3～4週目



850hPa流線関数

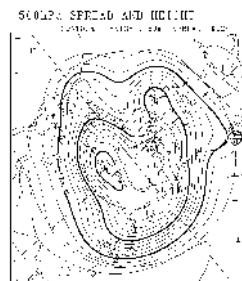
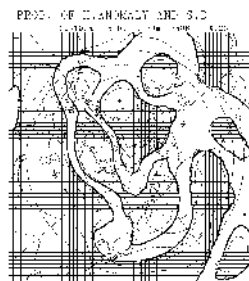
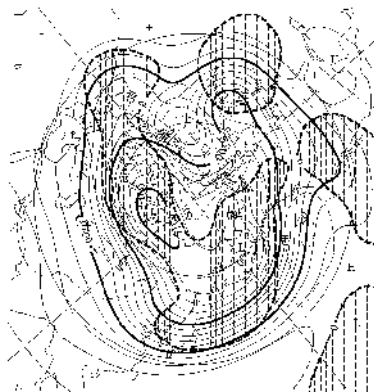


予報資料の解釈(各週) 北半球循環場

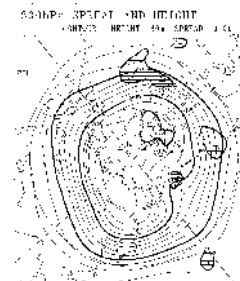
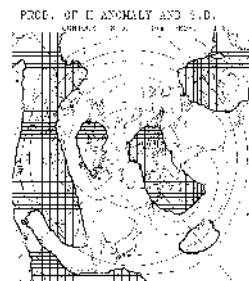
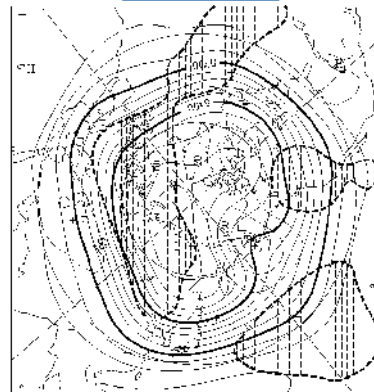
500hPa高度は、1週目は東シベリアから本州付近にかけて負偏差で、全国的に寒気の影響を受ける。2週目は、極渦が西シベリアから中央シベリアで強まる一方、ベーリング海ではリッジが強まり、日本付近では1週目の負偏差から弱い正偏差に変わる。3～4週目は、リッジが東シベリア付近へ西進し、日本の南は帯状に負偏差となる。ただし、このリッジ周辺や日本の西ではスプレッドが大きく、リッジの動向とその影響については不確実性が大きい。なお、これらの極渦とリッジの動向には成層圏の極渦の大きな変動が関係している。

500hPa高度

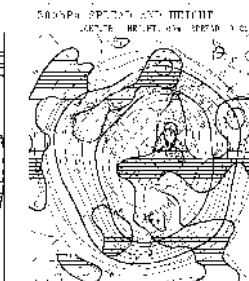
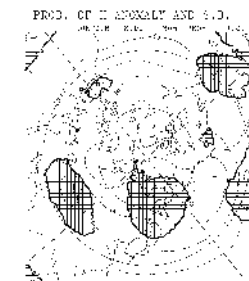
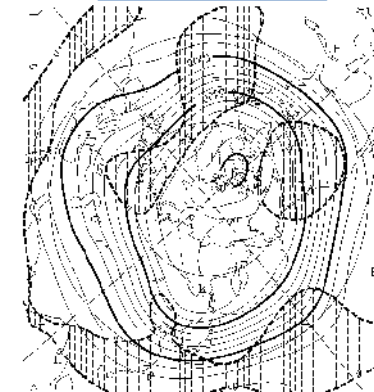
1週目



2週目



3～4週目



予報資料の解釈(各週) 日本周辺循環場

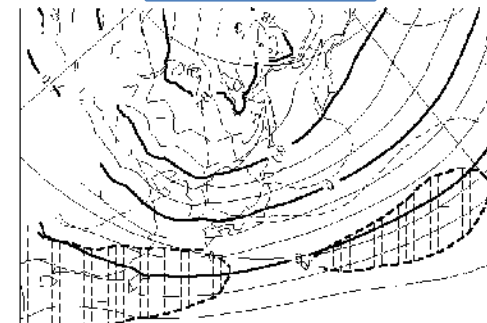
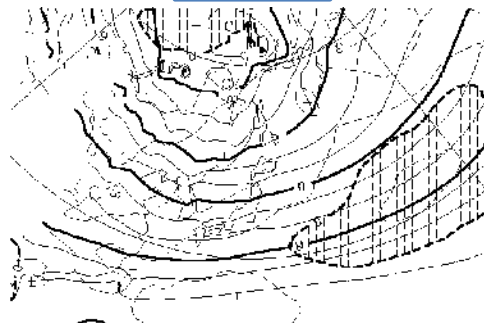
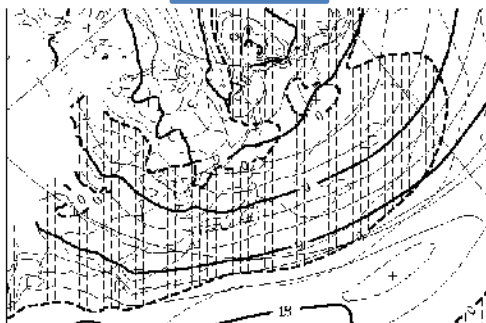
850hPa気温は、1週目は日本付近はおおむね負偏差。2週目は一転広く正偏差となる。3～4週目は北日本中心に正偏差が続くが、沖縄・奄美は弱い負偏差となる。海面気圧は、1週目はシベリア高気圧が強く、東シナ海へ張り出す。大陸から本州付近は正偏差で、東・西日本中心に高気圧に覆われやすい。2週目は、中国東北区付近を中心に負偏差である一方、日本の東は正偏差で、日本付近は冬型の気圧配置が弱い。北日本中心に低気圧前面の暖かい空気が流れ込みやすい。また、東・西日本中心に相対的に気圧が高く、高気圧に覆われやすい。3～4週目も日本付近は冬型の気圧配置が弱く、西日本中心に高気圧に覆われやすい。

1週目

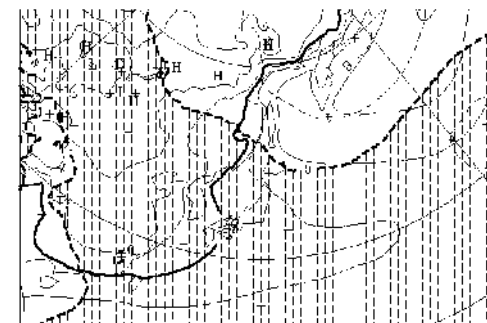
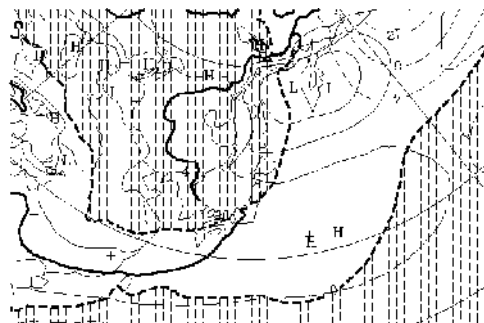
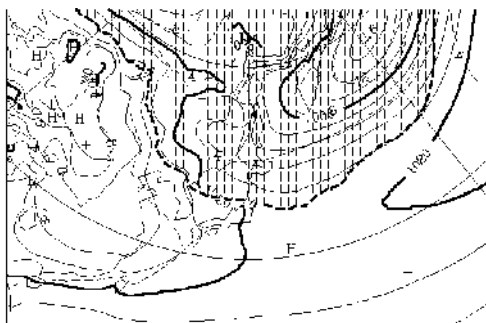
2週目

3～4週目

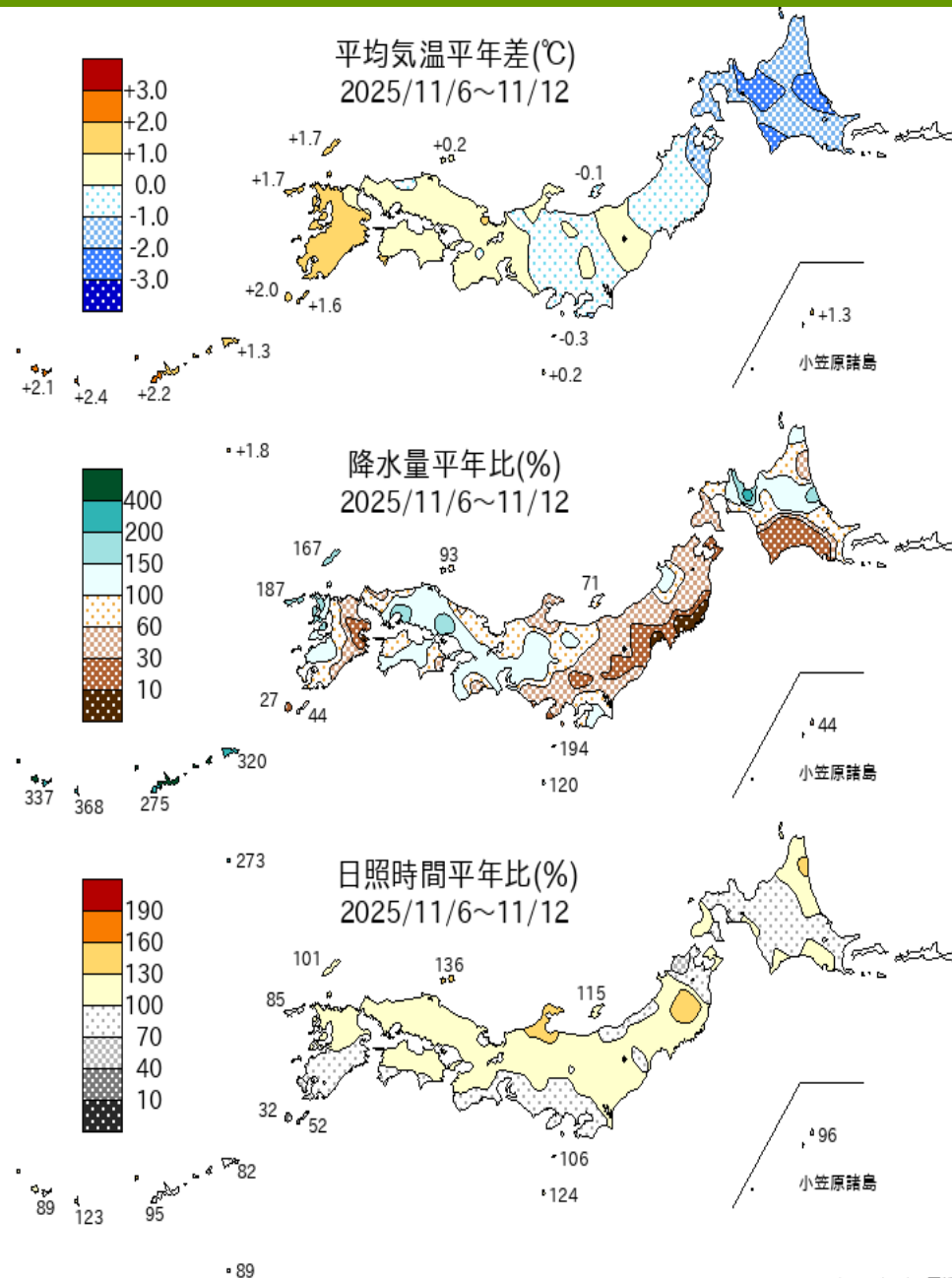
850hPa気温



海面気圧



(参考)最近1週間の天候経過



最近1週間(11月6日～11月12日)は、日本付近を低気圧と高気圧が交互に通過し、全国的に天気は数日の周期で変わりましたが、低気圧や前線の影響を受けにくかった北日本太平洋側を中心に、降水量は平年を下回った所がありました。高気圧に覆われやすかった東日本日本海側では日照時間が平年を上回りました。沖縄・奄美では、10日から12日にかけて、前線や台風第26号の影響を受け、記録的な大雨となった所があり、降水量は平年を大きく上回りました。気温は、北日本中心に寒気の影響を受けた日があった一方、西日本や沖縄・奄美では低気圧や前線に向かって暖かい空気が流れ込んだ日があったため、北日本では平年を下回り、沖縄・奄美では平年を大きく上回りました。